飴だま

新美 南吉

春の暖かい日のこと、渡し舟に二人の小さな子供を連れた女の旅人が乗りました。

舟が出ようとすると、

「おオい、ちょっと待ってくれ。」

と、土手の向こうから手を振りながら、侍が一人走ってきて、舟に飛び込みました。

舟は出ました。

侍は舟のまん中にどっかり座っていました。ぽかぽか暖かいので、そのうちに居眠りを始めました。

黒いひげを生やして、強そうな侍が、こっくりこっくりするので、子供たちはおかしくて、ふふふと笑いました。

お母さんは口に指を当てて、

「黙っておいで。」

と言いました。侍が怒っては大変だからです。

子供たちは黙りました。

しばらくすると一人の子供が、

「かアちゃん、飴だまちょうだい。」

と手を差し出しました。

すると、もう一人の子供も、

「かアちゃん、あたしにも。」

と言いました。

お母さんはふところから、紙の袋を取り出しました。ところが、飴だまはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」

「あたしにちょうだい。」

二人の子供は、両方からせがみました。飴だまは一つしかないので、お母さんは困ってしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへ着いたら買ってあげるからね。」

と言ってきかせても、子供たちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。

居眠りをしていたはずの侍は、ぱっちり目を開けて、子供たちがせがむのを見ていました。

お母さんは驚きました。居眠りをじゃまされたので、このお侍は怒っているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子供たちをなだめました。

けれど子供たちはききませんでした。

すると侍が、すらりと刀を抜いて、お母さんと子供たちの前にやってきました。

1 【渡し舟】川などで、人や荷物を向こう岸に運ぶ船。

お母さんは真っ青になって、子供たちをかばいました。
侍が斬り殺すと思ったのです。
「飴だまを出せ。」
と侍は言いました。
お母さんはおそるおそる飴だまを差し出しました。
侍はそれを舟のへりに載せ、刀でぱちんと二つに割りました。
そして、
「そオれ。」
と二人の子供に分けてやりました。
それから、またもとの所に帰って、こっくりこっくり眠り始めました。

〈出典『名作童話　新美南吉30選』（春陽堂書店、二〇〇九年）〉

【著者】新美 南吉（にいみ なんきち）
一九一三（大正二）年―一九四三（昭和一八）年
児童文学者。愛知県の生まれ。
【著書】『ごんぎつね』、『おぢいさんのランプ』、『手袋を買いに』など

居眠りのじゃまをした子供たちを、

6【へり】ものの端のあたり。